

乳幼児（0～6歳）の足部と手部の成長の変異
 聖徳大短大 大塚美智子
 日本女大家政 ○奈良智子 千葉桂子

（目的）乳幼児期は歩行開始時期に相当するため、足部の成長・形状に著しい変化が現われる。また個人差も大きく、衣服や靴のサイズ設定のために足部の成長・形状を詳細に把握することが重要である。前報では乳幼児の足部の縦断的データを用い、計測値と足型形状の成長変異を中心に検討を行った。本研究では同じ体肢である手部と足部との関連、性別における成長量・成長カーブの差異、また個人の成長追跡データの特徴について検討した。

（方法）資料は首都圏在住の保育園児（0～6歳）の1）横断的データ212名、2）縦断的データ22名であり、計測は1）1992年・1993年の夏季2回、2）1991～1993年の2ヵ月おきに10回行った。計測項目は足部に関する10項目、手部に関する7項目と身長・体重の全19項目である。また同時に足型輪郭形状を採取し、第2指骨頭点・左右ボールジョイント・踵点を結んで得られる角度8項目、長径6項目を測定した。

（結果）1. 足幅と手幅の相対変異は、相関係数0.76と比較的低いが、足長と手長では相関係数0.89を示し、高い相関が認められた。2. 身長別に成長の変異をみると大転子高・膝関節高・全腕長は性別に差がないのに対して、足幅・足囲ウエストに関しては男子のほうが女子より大きい値であり、幅広であることが示された。3. 足部のアーチ形成の時期における個人差について、内果高・外果高の成長曲線から明確に示された。4. 足型輪郭形状の追跡データから、足軸角度は成長に伴い大きな個人差を示し、脚部形状・歩行形態の影響を強く受けると考えられた。